

白樺派の作家作品研究
-木下利玄の散文作品について-

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 明治大学人文科学研究所 公開日: 2018-07-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 宮越, 勉 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/19481

白樺派の作家作品研究 ― 木下利玄の散文作品について ―

宮越

勉

A Study of the Writers and Works of the Shirakaba-ha (White Birch Society): The prose works of Rigen Kinoshita

MIYAKOSHI Tsutomu

It is notable that Rigen Kinoshita in Shirakaba-ha (White Birch Society), who is known as a poet today, published novels, short stories, literary sketches and travellers' journals around the time Shirakaba was first published in April 1910. This aspect of Rigen has hardly been researched. Given that, the paper explores what kind of works he actually produced and how they could be evaluated and appreciated. In so doing, I would like to shed light on an unknown face of Rigen.

Rigen was born in Okayama prefecture. When he was five, in the wake of the death of his uncle living in Tokyo, who was a viscount, a former Lord of Ashimori, he left his birth parents to move to Tokyo, where he was educated at Gakushuin. At the age of 14, by the time he joined Nagazono school with its president Nobutsuna Sasaki, he had already started publishing a number of tanka, thirty-one syllabled verses such as *Kokoronohana*.

Okyō published in June 1907 is one of Rigen's short stories, which was greatly admired by Naoya Shiga, who was then an apprentice writer. The work is one of his masterpieces for its completeness as a message against wars. A short story followed *Okyō* titled *Banreitou* published in October 1907 has its strong sense of reminiscence about his hometown Ashimori, but it was met by the criticism of Naoya Shiga, which Rigen accepted and re-edited accordingly. It is possible to argue that *Banreitou* counts as his masterpiece, Rigen wrote no more novels.

Rigen published a number of literary sketches such as *Futokoro* (May 1910), *Kenbutsu* (July 1910), *Onnano-hito* (August 1910), *Nikai* (December 1910), *Yama* (January 1911), *Ame* (July 1911) *Yama-asobi* (November 1911) and *Yamano-shuku* (March 1912) after *Shirakaba* was published. What can be observed in these works are his literary mastery in his depiction of his loneliness, reminiscent of his hometown Ashimori and natural landscapes. After this, Rigen moved on to devoting himself to make tanka, which contribute to his fame today as a poet. The paper argues that Rigen as a novelist is worth exploring and that this aspect of Rigen should be further explored.

白樺派の作家作品研究 —— 木下利玄の散文作品について ——

宮 越 勉

はじめに

木下利玄といえば、『白樺』創刊時(明43・4)からの白樺派の有力な同人の一人で、今日ではもっぱら歌人として知られていよう。なるほど明治三十二年、十四歳で佐佐木信綱主宰の竹柏会に入門し、『心の花』や『白樺』などに多く短歌を掲載し、大正十四年に僅か四十歳の若さで病没するまでその主要な文学上の仕事は短歌にあり、日本近代文学史の上でも歌人木下利玄として論じられ評価もされてきた。が、本稿は、思いのほか利玄が『白樺』創刊前後に小説や小品や紀行文などの散文を多く執筆し発表していることに着目し、利玄の散文作品とはいかなるものだったのか、それはいかに評価されるものなのか、というこれまで殆ど論じられて来なかつたテーマを設定し、そこから利玄の知られざる文人としての面貌を明らかにすることを目指すものである。

一

木下利玄が志賀直哉、正親町公和、武者小路実篤とともにのちの『白樺』公刊の母胎の中核となる「十四日会」なる文学読み合わせ会を始めた明治四十年には、短歌掲載と併行して『心の花』一月号に紀行文ともいえる「花輪村」を、六月号に小説「お京」を、十月号に小説「萬霊塔」を発表している。「心の花」は当時の文壇でも名の通った雑誌で、その意味で志賀や武者小路が習作期にあるなか、利玄が逸早く文壇デビューを果たしていたといえるが、上記散文作品の出来栄はいかなるものだったのかという問題から始めたい。

紀行文「花輪村」は、小青というペンネームによるもので、「余」なる人物の房総半島への一人旅(元名、大山、金東の峠を越え花輪村の川口屋という宿に泊まり翌朝宿を出発した)を綴ったものである。「余」の孤独感は全篇に横溢し、秋の紅葉した周囲の自然も美しく描写されたものとなっているが、いかんせん文語文脈なので、明治四十年時点では近代文学としての新しさは殆どなかつたといわざるを得ないだろう。ただ、作中の「余」を木下利玄とすれば、利玄は明治十九年

一月一日に旧足守藩主の弟木下利永、母やすの次男として生れたが、明治二十三年三月、五歳の折、伯父の子爵木下利恭が東京の邸で死去し一門の会議で利玄を養嗣子にすることが決定されたのに伴い、十一月には故郷の足守を去り、それ以後、実の父母とともに暮らすことはなかったという寂しい境遇を鑑みると、僅か二頁分の「花輪村」に漂う孤独感や漂白の思いも味わい深いものと享受されるのである。

小説「お京」は木下小清の署名による口語体のものである（目次に小説と明記されている）。僅か四頁少しの短篇小説であるが、三節構成のうちにいわば対照描法というべきものが張り巡らされ、反戦の思いついてテーマが打ち出されている。「一」は、「十九のお京」が「銀杏がへし」を「白い手拭」に隠して、「雲雀」が囁るなか、その手に「歛」を持って畑打ち仕事をしていることから始めている。そして周囲の「連翹」と「菜の花」が「黄を争つて居る」とし、「同じ黄色な春の花でも菜種は陽気で赤い櫻がけの気軽な茶摘女、連翹は少し陰気でおとなしくお経を読む尼君の風がある。お京は菜の花のやうな姿で連翹の様な気持で居る」（傍線は引用者、以下同様）と春四月の植物を擬人化、比喩し、お京が「出征軍人の新しい妻である」という文に繋げている。そして去年の秋に夫が補充兵で召集された頃の事が描写され、その出征の前の晩、お京は夫に無事の帰還を願い、夫は残していくお京に情を込めて達者でいてくれとだけ言ったのである。「遠くで吠える犬の声」は戦闘を暗示し、櫻の梢に高く「寒月」が懸かって「冷たい光」で輝いているのは若い夫婦の行く末の不安さを象徴しているかに読み取れる。また、翌朝の村の衆と停車場まで送って行くシーンでは、お京は軍人の妻なれども別れの辛さがあり、夫が丈夫で帰って貰いたいと内心思い、既に出征して戦死し功名を得た軍人（要さん）の妻であるおかねさんと二つになる児の身の上を気の毒に思うのであつ

た。暫しの回想から畑打ち仕事の現在時に戻り、「一ひらの雲」が日にかかり、お京の影、木の影、草の影などが一時に消えるさまを描き、雲雀の歌も暫し途絶えたと結んでいる。「二」は、お京の夫順吉に焦点を当てる。女房思いの優しい順吉だったが、兵営にいて出征の命令を待つ間に心変わりが出て来る。順吉の心の中に「二人のまるで性分の違つた兄弟が居て日毎争ふ」という。一人は、「明日知らぬ命ならば命ある今日快楽に耽らう」という誘惑に負けず「正しい道があるけ」というものでお京の幻が助けるが、他の一人は、「息ある今日は迷へ、迷うて楽しいめ」という多くの男たちにつくもので、ついには後者の銘酒屋の酒に酔い、蓮葉な女と戯れることになってしまふのであつた。こゝは順吉の心中の相反する思いの葛藤、対照を捉えて、幻が現実にく服するさまを描いている。「三」は、「一」のほぼ一年後、「二十のお京」が縁側で縫物仕事をしていることから始めている。雨上がりのうららかな日が乱れたお京の「丸髻」を照らし、周囲には「木瓜の朱色の花」、「虻」の眠そうな鳴き声、隣の「沈丁花の強い匂」があり、雲のない碧い大空が広がっている。が、それとは対照的に「お京は淋しい思になる」というのである。日本が露西亞に勝ち、順吉は無事帰還したものの、「放逸の癖」が取れず、「出征前の体を以て帰つたが、出征前の心は失つて居る」とする。順吉の田は「鋤」も入れず、蓮華草の咲くに任せてある。お京にも優しくはない。夫を失っているおかねさんは「哭いてゐる」が、夫を迎え得たお京も「泣いて居る」のだ。春の日あしは長く、「垣根は高い桃の影が縁側に映つてお京の膝にも一枝のつて居る」で締め括られている。

利玄に反戦、厭戦の思いが早くからあつたことは、明治三十四年四月の『輔仁会雑誌』に掲載された「雪の日に北京城の兵士を思ふ（即題）」を徴してみれば明らかである。「われ」（利玄）は使用人の兄が

五師団の兵士として未だ北京に残っているのを思い出し、消息を問うと、「此頃は寒さきびしく、雪やけにて指耳などを失ふ人さへあり。と云ひこしぬ」と返答があった。そして、兵士たちを思い、「故里の野らに歟取りし日を忍びもしつらむ」、「残り置きし妻子を慕ひし事もありなむ」などとしていたのである。これがベースとなり、出征兵士が酒色に耽るケースが多いということをのちに知り、あとは、一篇の小説としていかに構成し表現するかが問題で、その実践となったのが「お京」であるとしてもいいように思われる。

このような「お京」については佐佐木信綱の計らいもあり、¹⁾発表の翌月の『心の花』(明40・7)に「お京」をよむ」として五名の評が掲載された。「登毛」(志賀直哉)は、「総体に欠点のない、よくマト、マツタ、作で、象牙彫の小さな人形を見るやうである」(傍点は登毛)、「欠点のないのが欠点」、「兎に角「お京」は木下君の処女作にして同時に傑作の一つとなるものであらう」と激賞した。「KO生」(正親町公和)は、「お京の憐れな姿」をもっと出して欲しかったのに、「四辺の春景」という「背景」が「出しやばり過ぎたから物足りないのかと思ふ」と批判しつつも、「木下君は大概春の歌ばかり詠むで居たが更に小説に筆を染めて而かも処女作にかゝる佳作を出されたのは余も亦君と共に喜ぶ次第である」とした。「無生」(武者小路実篤)は、「材」(背景に戦争)は「深刻」になり得るものであるが、「お京」は「深刻な作」ではない、「美しい小説」を書いてしまい、「人の心を「えぐる」ことの出来なかつたことを惜く思はざるを得ない」、「実際自分はお京を読んで心地よく美しく思つた、しかしお京に同情はしたが泣くことは出来なかつた」と辛口の評をした。「刀畔」(高橋刀畔・竹柏会の一員)は、「情景ともに備はりて、敬服の外無之候」とし、「簡にして潔、一卷の水彩画を展べし如く、短詩の才ある者にあらずんば能はざる所

と首髻かれ申候」とした。「椎の実」(竹柏会の一員だるう)は、「流行の嗽石式の文体を、是等は能くまなんだもので、文章のだれぬ所が気が利いて居ります」とし、「好いと思つた句」を五ヶ所引用している。一方に志賀などの激賞あり、一方に武者小路などの美しいが物足りないという評があるが、私見では、お京、順吉の人物造形に深みが足りぬと感じるものの、志賀評を少し割り引いても、その文章表現と構成の卓抜さから、纏まりのある好短篇だったとしたい。

利玄の小説二作目である「萬霊塔」は、木下小青の作として『心の花』明治四十年十月号の巻頭に掲載されたものである。が、利玄の小説作品としては最後のものになった。これはいかなる事情によるのかと考えると、今日では、「萬霊塔」の生原稿が残されていて、志賀の「萬霊塔」に対する批評、直しの要求を書いた原稿が志賀全集に収録され、²⁾紅野敏郎の全集後記によれば「利玄の原稿の修正部分は赤字で書かれているが、志賀の指摘はかなり採用されている」とのこと、この辺の事情から、利玄がこの作以降小説を書かなくなつたと推測される。志賀の多くの修正要求に素直に従つたものという裏事情があったにせよ、「萬霊塔」の作者はあくまで利玄であり、小説としての出来栄などを論じることで見えて来るものを闡明にしたいと思う。

この作は世に殆ど知られていない作品なので、その内容のあらましを紹介することから始めたい。その際、志賀の修正要求に従つたと見られる箇所には波線を付しておいた。作中の「余」(その名は幸三)は、初冬に近い秋の日に、里子に出された長浜村を「七つ」の折に去り東京の家に戻つたのだが、それ以降、「十の夏」、「十四の夏」、「十七の春」、「二十一の秋」と長浜村を訪れ、今また「七年」ぶりに昔と変わらぬこの長浜村の雲松寺界隈を訪れたのである。折々の忘れられない思い出を回想し、また今現在時のことも挿入して描くという形式を

探っている。「七つ」の別れの折は、乳母（ばあや）とその一人娘であるきた坊（父を亡くしていて可哀想に思い自分の妹のように思っていた）との別れが辛く、秋の僧堂裏の公孫樹の黄色の葉が散って乳母の帯の結び目にかかっていたのを今でもよく覚えていてという。「十の夏」は、乳母の村の者が東京を訪れた際、急に乳母に会いたくない、母上のお許しも出たので、その人に連れられ、学校の夏休みに長浜村を訪れたのだ。お盆で、きた坊と盆踊り（女子衆の赤い帯と若い者の赤い草履が目について羨ましかった）を見、その翌日の朝涼の間に乳母に連れられ雲松寺の裏山にあるきた坊のお父さんのお墓詣をし（黄色と白色の夏菊を竹筒に挿した）、先に仲好しの一人だった正念さんと出遭い、乳母だけ先に帰って、暫し遊んでいると、正念さんの兄弟子の二人が僧堂裏の青桐に小刀でいたずら書きをしてこちらを見て笑っていたが、見れば相合傘におきた幸三と並べて書いてあった。「僕」（回想の中の「余」はこう表記されている）は、正念さんを見て笑っている意味が判らなかつた。「余」は雲松寺の十五段の石段を登り、かなりの高さがあつて街道からも海岸からも見える萬霊塔を「余が幼馴染である」、「村の主」のような存在だと幼心に覚えていた。今、その萬霊塔を見て、当年の長浜村にいた「余」になるような心持がしたのであつた。「十四の夏」は、これも学校の夏休みで、中学二年になつていたので一人で長浜村を訪れた。すぐ友達は出来たが、雲松寺の境内で遊んでいると突然の大雨となり、きた坊が「兄さま御飯よ、」と言って傘を持って迎えに来てくれたが、二人をからかう子がい、「僕」はきた坊を残し、雨の中を濡れて駆け出した。雷が鳴る。きた坊が雷を大嫌いなのを思い出し、きた坊を残して来たのをひどいこととしたと思つて、きた坊が裸足になつて傘を斜に小走りて後を追つて駈けて来た。きた坊の手を取つて、堪忍しておくれと託びた。

翌日、家の庭に一輪の姫百合が咲いたのだが、雲松寺に何気なく一人で行き、桐の木の相合傘の意味が臆気に判り、家の庭の物干しの竿に濡れた「僕」の着物ときた坊の着物がかけてあつて、「きた坊の赤いつけ紐と僕の白いつけ紐が結んである」のが目につき、その二つが溶け合つたほどの桃色が「僕」の心を染めて「恋とは知らぬ恋」となつた。周囲は雨後の地面から陽炎がたつて、朝ながら日ざしが強かつた事まで、この時の事はハッキリ覚えていて。「余」は寺の山門を入ると、赤蜻蛉が五つ六つ飛んでいて、「さびた浄舎じやうしゃの秋に、いさゝかの艶を色どつて」飛んでいた。「十七の春」は、きた坊は十四になるのでさぞ娘らしくなつてに違いないと思つていたが、逢つてみると思つたに増して大人びていて、髪は桃割れに結つて「丈長を白くかけて銘仙の袷に赤い帯をお太鼓に結んで」高く背負い、「僕」を見てはにかみながらお辞儀をしたのであつた。きた坊の眼と「僕」の眼が合うと、「僕」は眼をそらしてしまい、庭を見ると山吹の早咲きが春の夕日を受け、「思はあれど云ひ得ぬを悩むやうに見える」のであつた。翌日、乳母ときた坊と「僕」の三人は隣村の薬師様へ詣つた。道中には、蓮華草、黄色い菜の花畑、青い麦の畑があり、空高く鳴く雲雀から見たら、「黄青紫に染め分けた毛氈」の上を「帯の黒い乳母」と「丈長の白いきた坊」と「紺緋の僕」とが「遅々たる歩みを運ぶと見えやう」と表現している。「僕」ときた坊の会話もあるが、互いにもう昔のような無邪気さはなくなつていた。今現在の雲松寺の境内の静けさが描かれ挿入される。「十八の秋」から「僕」は仙台の高等学校に入り、勤儉尚武を標榜する学生仲間に入ったので、きた坊や乳母との手紙の往復も思いもよらず、夏休みもここ長浜村には足が向かなかつた。「二十一の秋」、文科大学に入った「僕」は長浜村を訪れるが、乳母の家の前で親子の巡礼が京の清水の御詠歌を歌つては鉦を叩き、次いで六

波羅の御詠歌を歌っていて、その無常の節が無常の秋に寂しくふるえた。乳母は村端の小さい家に引越して老け込んでいた。また坊は東京に出たがっていたが、父方の従兄の世話で今は京の今出川にいるという。その夜は、寝つかれず、蟋蟀の鳴き声、遠く波の音、松風の声が幽かに響き、その寂寥は今思い出しても気が滅入るようだ。その翌年の初秋、乳母は亡くなったという知らせがあり、涙ぐんだ。思いの中心は、きた坊と「僕」の「恋」にあり、「いま秋風の十一月、余はその相合傘の青桐の下」に立っている。その後のきた坊は京都でさる人に縁づいたと聞き、庭で張り物をする姿、あるいは針仕事に疲れ庭に眼をやれば菊が散っているだろうと想像する。「余」はこの冬から文学研究のために英吉利へ行く。英吉利に行っても、日本が恋しくなったら、この萬霊塔と青桐を思い出さう。長浜村の秋は以前と変わらぬ暮れるが、人間は年毎に様を変え、所を変える。百舌がけたたましく鳴いて、秋の日は暮れ近い。

雑誌で正味十一頁分の小説なので、これでもコンパクトにその梗概を纏めたつもりである。作中の主人公「余」は里子に出され、その乳母の娘きた坊と相思相愛の関係にあったのだが、別々の人生を辿る運命にあり、それが多少センチメンタルに描かれたようにも思われるものの、作中に鏤められた色彩の豊かさがある種の浪漫性を醸し出しているだろう。作者利玄と作中の「余」とはイコールでは結べないが、仔細に考察すれば、結べる要素もあるとしたい。利玄に里子に出された形跡はないが、伯爵家の友人正親町公和には里子に出された経験があり、それを借用し、岡山県賀陽郡（のち吉備郡）足守町で生まれ育ち、子爵木下家の都合で、五歳にして東京に移ったことからすれば、故郷への思いは強く懐かしものだったに相違ない。「萬霊塔」の舞台となる長浜村とはどこなのか。同じ岡山県の邑久郡に長浜村というのが

存在した。明治八年に奥浦村と小津村が合併して長浜村となり、明治二十二年に単独村制、以後昭和二十九年に近隣の町村と合併して牛窓町となり、現在は瀬戸内市となっている。牛窓港や錦海湾に近い海辺の村落である。志賀は「萬霊塔」の生原稿で読んで、「一体高浜村とは何所ですか、参謀本部の地図にもないと思つて余り勝手になさつては」と注意を与えていた。この「高浜村」を実在する「長浜村」に改変したのではなからうか。ここには金剛頂寺や本蓮寺や妙福寺観音院がある。多少の改変があつても、この小説の舞台が岡山県邑久郡長浜村を想定していたとすれば、利玄には土地勘があつたであらうし、また故郷への思いの強さの反映と見ることも可能となる。また、作中のきた坊は幼少時の利玄の幼馴染のある女児がモデルとも考えられるが、作中の相合傘を重視すれば、執筆時の明治四十年における利玄の思い人をそのモデルに想定することも可能となる。というのは、木下利玄日記の明治四十年八月二十二日の項に、「はなれの十畳にならんで寝て蚊張の中で二人の恋を語りあひ吾々はどうすればよいかを話合ふ「半月」と「小青」と二時迄はなす」とあつて、その表記のありようから相合傘を連想させるからである。「半月」とは直哉、「長」とは「大津順吉」（『中央公論』、大元・9）の千代のモデルの岡野長であり、「小青」とは利玄、「いち」とは国広いち（志賀日記明治四十年八月二十二日の項に「木下に国広氏の話を聞き同君の家に一泊」とあるが、「国広いち」の詳細は不明）である。ともあれ、「萬霊塔」は、実の父母に早く引き離され、生れ故郷を喪失した孤独な利玄の側面もうかがえる秀作であつた。

明治四十三年四月の『白樺』創刊以降の利玄の散文作品について考察していきたい。

僅か正味一頁分の「ふところ」は、「小品六篇」(『白樺』、明43・5)のうち的一篇である。作中の自分は温泉から上がり、床の中に身を埋めてうっとりしていると、隣室から子供の泣く声とお母さんのそれをすかす声が聞え、やがて「ぼんやりしている自分の心に、お母さんの肌に暖められて居た時分の、あの遠い、ほのかな気持ちが、しつとり流れた」のであつた。自分は幼い頃の自分になり、お母さんの懐で泣いている。今の自分も泣いている。隣室の子供が泣くのをやめると、自分も泣くのをやめた。お母さんは自分の頬に接吻した。それからお母さんは子守唄を「なつかしい声」で唄う。この唄につれて自分の心はお母さんの「乳のある柔い懐」に溶け入るように思われ、そうして、「やすらかな夢路」に入った。一つの子守唄を聞いて寝たのは隣室の子供と自分とであつた。以上のような散文詩的小品文は利玄の成育事情を知つてこそ、その味わいも高まるものと思われる。利玄は五歳まで足守にいたが、家族と別れて東京に養子として出され、利玄が六歳の時に生母やすは故郷で死去したのだつた。この小品文は、温泉宿の襖一つ隔てた隣室で泣く子供と自分が一体化し、隣室の母も幼くして別れた実母と重なつて懐かしみ、その「ふところ」でやすらかな眠りに就くという、ほんわかとした情感に溢れた佳品となつている。

五頁分の小品「見物」(『白樺』、明43・7)は、四十八年ぶりに中国地方の旧城下の在所(足守としていい)から東京へ出て来た今年六十五になる荒木老人(十八まで麻布広尾の藩邸に仕えていた)を自分

(利玄としていい)が、春らしい日に東京見物案内をしたものである。老人は、上野で愛用の住吉の煙管を買い、発明品博覧会(明治四十二年四月に開催している)よりも博物館が見たいと言つたのでそこへ行くと数多くの陳列品中、刀剣類に関心を持ったのであり、浅草では牛肉屋は好かないといい、日本料理屋で蓄音器から流れる端唄や義太夫に「えーなあ!」と悦に入り晩酌を楽しみ、活動写真では西洋のものは好まず、ここで自分とはぐれてしまった。自分は浅草をあちこちと老人を捜すが見つからず、昔の人、田舎の人に今日は刺激が強すぎたかと心配したが、夜遅く大久保の自宅に帰ると老人は無事に帰つて住吉の煙管でスパスバ煙草をふかして、老人の身を案じたのは杞憂だつたとした内容になつている。荒木老人には足守藩に仕えていた旧家臣のモデルが存在しただろうし、頑ななまで西洋を嫌うかつての武士氣質が出ていて、日常生活の特別の或る一日の出来事をその天気合(夜通しの雨が上つた朝の陽炎の立つ春らしい日和)から起筆して、利玄文学の特色も出、利玄の優しい人柄もうかがわせる好小品に仕上がつていると思う。

六頁少し分の散文「女の人」(『白樺』、明43・8)は、自分が夢の中で六歳位の子供になつていて塔ノ沢と思われる温泉宿で出会つた丈が高く大きい眼をした美しい二十歳余りの女の手に引かれて笛塚まで上つて行つた際の「夢の女の人」と、自分が幼い折に招魂社の五月の御祭で見かけた白っぽい地のフランネルを着て派手な紅い帯を胸高に締めている女の人を見ず知らずの他人ではなく思ったという「記憶の女の人」とが朝の目覚めの霧の香が漂うなかで一緒になり、決して手に触れられぬ美しい女の人としてあるということを綴つた浪漫的な作品である。この「女の人」は、孤独を感じる折の利玄が、その三歳の年に十幾つで亡くなつたと実母から聞いている姉のようでもある

としているが、そう特定は出来ない、現実性の臆気な、自分に優しくそして自分を見守ってくれる美しい憧憬の女の人、と解した方がしっくりいくように思う。また、夢の中の笛塚の周囲に女郎花や桔梗などの秋の草が咲き乱れていたことをいい、さらに、沈丁花の強い香を嗅ぎ、木蓮の強い色を見、木犀の香の漂いがかに悲しい頃などにこの「女の人」が思わずも心に浮かぶと表現した文脈に利玄文学特有のものを感ぜさせるものがある。

四頁分の「二階」(『白樺』、明43・12)は、目次では小品となつてゐるが小説の趣を持つ作品である。主人公の自分(菊池という姓である)は、今から五、六年前の二十の春に、或る田舎町の遠縁の家に絵を描くのが目的で十日ほどその家の二階を借りたことがあつたが、主人が留守の或る日の昼過ぎ、おようさんというまだ子供のいない二十七になる艶めかしい取り成りの奥さんが二階に上つて来て、絵の修正をしている初心な自分を誘惑しにかかつたものの、なんとか理性を働かせ切り抜けたこと、夕飯時に主人がいる前では平常と変わつていない人妻の不可解さなどを回想するとともに、今でも菜畑の生温い匂いを嗅ぐと、艶めかしいおようさんの聯想が起ることとしている。利玄の作品としては異色と思われるが、年上の艶めかしい人妻から誘惑を受けるというスリリングな出来事を、春の日の生暖かさで二階の雰囲気を覆い、テレビンの烈しい刺激性の匂いや奥さんの黒髪の油の匂いなどの嗅覚を中心に描いていることに巧さを感じる。小品とされていることを重視すれば、これは利玄の実体験に基づくものだったかもしれない。

小品三篇「山」(『白樺』、明44・1)は箱根の温泉場を舞台にしていることで共通している。五頁分の「地震」は、明治四十一年十二月二十九日の晩から三十日の朝にかけてのことで、自分とT君、M君、K

君が底倉の蔦屋に泊まり頻繁に起こる地震に恐怖や不安を覚えるさまを中心に描いているが、その間、昨夜話していた「東京の無車」(武者小路)、「沼津の沙鷗」(正親町)、「湯河原の志賀」の事を思い、また今時分は有楽座で呂昇が壺坂を語っていると思う事が挿入されて、武者小路と正親町と志賀との関係の親密さ、娘義太夫熱もうかがえ、翌朝は雨だったが目白も鳴く穏やかさのなか宿の人達に見送られて湯本に下つたとしている。三頁分の「霧の朝」は、蘆の湯の紀伊国屋の別荘に泊まっていた自分が本店の二階にその祖母や妹たちと滞在していた志賀たちと一緒に、八月十一日(明治四十二年か)の朝、深い霧のなかを発していく道中を、「叢には淡雪や女郎花や名を知らない紫の花などが濡色清く朝の挨拶をして居る」といった自然の景物を擬人化した文も交え、また茶店で休む西洋人の若い夫婦や道の月見草に関連して自分と志賀との文学的会話の妙味も描かれ、湯本の方に行つたことを書いてゐる。六頁分の「八月十六日」(明治四十二年と推定される)は、箱根の湖畔の橋本屋に昨夜は淋しく泊まったが、今日は一転して、宿の女中さんたちとの親しい語り、宿への道の散歩での夏の花が咲くなかでの心地よさ、泊まり合わせるようになったそそかしい客の口髭(石谷氏)との交流などを描いている。この三番目の小品はいささか冗漫なものと思われたが、利玄は泉鏡花と夏目漱石を愛読していて、ここでは漱石の『文学論』を読んでおり、また『白樺』創刊時の年下のメンバーの一人である田中雨村の家で、蓄音機で謡を聴いたことがあるのも知ることが出来る。

小品三篇「雨」(『白樺』、明44・7)は雨の日の事を写生文風に綴っていることで共通する。二頁分の「雨のやみ際」は、末尾で(明治四十二年五月稿)とされた旧作だが、自分が大学で井上さん(井上哲次郎)の講義が午後五時に済んで教室を出た時は小雨で、食事のあと通

りに出ると、蝙蝠傘や雨傘が乱れて動くなかに、いつか無車（武者小路）と青柳亭で東猿一座をきいた時にいた或る女義太夫親子がいるのを見かけ、四丁目から電車に乗り、電車の乗り換えもあつて永代橋まで行くのだが、電車から外を見て、町々で傘をさす人やたたむ人、川に碇泊する舟が一樣に苦をかぶっているなどの雨の夕暮れの風景を描き、その行き先が越前堀の水難救助会だったことで結んでいる。なぜ水難救助会なのかといえ、ここには『心の花』の創刊以来の責任編集者で帝國水難救助会を創設し常務理事を務める石樽千亦（明2生）がおり、利玄が短歌関係のことで訪れたと推定される。三頁分の「雨もよひ」は、末尾で（明治四十二年二月稿）とされた旧作で、長い旅の終わりに近い一日、日氏（京都四條の大きな呉服問屋の主人）の案内で、西陣、堀川（綺麗な所という聯想があつたが実際は異なつていた）を見物し、加茂川に出た頃から雨になりそうな天候となり、人に逢わない札の森、何木を植えても終になるという宮（比良木神社）、モクモクと水が湧く池（みたらしの池）を廻り、俵で一條から三條の方に急ぐ時分から雨が降り出し、料理屋での夕食はすっぱん汁以外はよかつたこと、「障子をあげたら賀茂川の柳が雨に髪を乱して居た」という利玄特有の擬人法を用いた文もあり、傘を傾けて日氏と都踊へ行き、済んで外へ出たら花見小路から四條通は雨夜を照らした灯（あかり）の前を傘が乱れて動いていた、と京都の町の各地を鬱陶しい空模様から傘が乱れる雨降りの風情ある情景への移ろいのなかに簡潔な筆致で描いている。二頁分の「山道」は、末尾で（明治四十三年五月稿）とされた旧作で、自分と友の六人は、十里の道を雨に打たれて木曾福島に着き、さらに雨が降りまさる中を明日木曾御嶽に登るつもりなのでその麓の黒澤までの三里の山道を絶え間なく降る雨の中を無言でただ歩き、宿で濡れたものを脱いで乾いた襦袢に着かえ鶏鍋にビールで暖か

い夕食の膳についたのだが、戸外は山の雨がざんざんと降っていたことを綴っている。小品三篇「雨」は、東京の夕暮れ時の雨の諸風景、夕方から雨降りとなった一日の京都見物、終日の強い雨降りのなか木曾山中を只管歩いた体験、と移動を旨とした雨の日の三つの小品をその配列に配慮した妙味のあるものになっていると高く評価したい。

六頁分の散文「山遊び」（『白樺』、明44・11）は、比較的長い期間にわたる紆余曲折を経たあと利玄が明治四十四年五月に栃木県平民横尾勝右衛門の四女照子と結婚し、七月に東京帝国大学国文科を卒業し、十月に実父利永（明39に死去）の法事（七回忌）のため新妻照子らを伴い故郷の足守に帰った際、総勢十六人で故郷の山である妙見山や龍王山で茸採りをして遊んだ或る一日を描いたものである。冒頭の一文は「足守川にかゝつて居る葵橋を渡る頃は、秋晴の太陽が豊年の田圃に暗く照つて居た」で、やがてその日の天候は曇りから一時的に雨が降りそしてまた秋晴れになったことをいっており、利玄のその日の天候に敏感でそれをきちんと描くという特徴がよく出たものになっている。妙見山で自分は松茸が地面に生えているのを初めて見て珍しいと思うのだが、「茸は松の根の、こぼれ松葉の下の灰色の土を掻けて、茶色の頭を揃へてしら／＼しくも黙つて居る。隠れん坊をして此処なら大丈夫と隠れて居る子供が、捜し出されたやうな顔をして居る」と擬人法を用いた表現で茸のありようを描写している。一行の者たちは嬉しい愉快そうな声を口々から漏らし、茸を取っては竹の籠に入れたのである。一行は妙見山の頂にある山番の小屋で暖を取って暫し休むが、小屋周辺に茸が沢山あり取っては籠に入れた。次いで、一行は弁当を開く事にした龍王山へと向うが、その山頂に着く頃は秋天再び晴れ、龍王山から足守の町を見下ろしたのである。その天辺にある「五六本の松」は遠くからこの町の目標になっているという。自分は五歳

でこの故郷を去ったが、十八歳に帰郷するまで故郷の思い出にこの「五六本の松」は残っていたという。一望する平野の田圃、足守の整然とした町並、足守川などは、「隈もないほがらかな日光につ、まれて喜んで居る」と表現され、打見られたのである。こうして急な龍王山を下るが、叢に虫が鳴き、遠くに鶉のような鋭い声の鳥が鳴き、コスモスの咲いている百姓家の背戸に出、葵橋を渡って自家へ帰って湯に入り、東京の親類や知人に送るための松茸の包みを作ったのである。総体的に、ゆったりムード、愉快な感じの雰囲気は漂う中での茸採りをメインにした山遊びのさまが描かれているが、先の利玄の小説「萬霊塔」の雲松寺の萬霊塔に相当するものが龍王山頂上の「五六本の松」だったことも判明し、利玄の故郷足守への愛着が感じられる秀逸な一篇になっていると思われる。

六頁分の小品「山の宿」(明45・3)は、利玄が志賀ら学習院の間と同様に長年親しんでいた鹿野山の丸七という旅館、そしてこの宿場全体が廃れていく運命にあると感じた明治三十八年の春と翌三十九年の春の滞在時の事をベースにしたものである。「此の山の宿は又寂びれたやうだ——かう思ひながら、自分は鹿野山宿の丸屋の軒をくぐった」の一文から始まる。この宿には三人の娘がいたが、自分が宿に到着した日は二番目のお幸の一周忌であったのだ。かつてはこの山の宿は賭博で繁盛したがそれが禁ぜられるようになって賑わいが下っていったのだともいう。翌朝は出戻りの姉娘のおさきが給仕に来たが、快活を装うものの淋しい影は眼元に漂っていた。一年後の春休み、先にこの宿に滞在しているS君(志賀)を追って来たのだが、今度は元来弱い身体の姉娘のおさきが亡くなって来たことを知るのであった。また、神野寺の先住の放縦から、この山の宿の目標であり防風の役目をしてきた杉木立が切り倒されることになった。豊竹昇之助

に似た末娘のおたねは東京の女学校に行っていて前年も今度も見られなかった。自分は山麓に野火のあった翌朝、S君に別れ下山したが、小米桜の花が山道の泥濘に散りこぼれていたのである。なお、この作は、廃れて行く山の宿、その住人たちの哀しい運命を感じさせるものとなっているが、志賀直哉が有島生馬に宛てた明治三十九年四月四日付けの長文書簡を参照すれば、ほぼ事実在即したものであることが証される。

おわりに

先述したように木下利玄文学の中心は短歌にあったのだが、第一歌集「銀」が洛陽堂から刊行されたのは大正三年五月のことであった。ここに至るまでの生活面に一瞥すれば、明治四十五年八月六日に長男利公が産まれたが十日には亡くなるという不幸に遭い(利公の爲めに)「白樺」、大2・8)でその詳細を知ることが出来る)ながらも、九月には細川護立の縁故で目白中学校の教師となり短歌作りにも励んでいたのである。が、本稿でみたように文学出発期の利玄は短歌作り一辺倒ではなく、秀作といえる小説「お京」は白樺派同人で公の場に出た最初のものであったし、「白樺」創刊後は小品を数多く書き、その殆どは今日的にみても埋もれさせておくのが惜しいと思われるものであった。盛況な竹柏会大会の模様を活写した「竹柏会大会の記」(「心の花」、明42・5)は文壇的資料として価値がある。また、利玄はよく旅をする人で、賑わっていた長良川の鵜飼時分とは異なる春の淋しい風情の岐阜を旅した折のことを書いた紀行文「岐阜」(「心の花」、明44・1)や約十年ぶりに訪れた景勝の地である興津を描いた紀行文「清見湯より」(「心の花」、明44・9)も残している。ともあれ、利玄の散文

作品群はもつと注目されていていと結論づけたい。

《注》

- (1) 紅野敏郎「木下利玄日記(新資料)(上)——「白樺」前史——」(『文学』、一九八二・九)は、佐佐木信綱の配慮により「お京」合評会依頼があったとしている。
- (2) 『志賀直哉全集 補巻一』(岩波書店、二〇〇一・一一)に「未定稿33万霊塔」として収録された。
- (3) 紅野敏郎「木下利玄日記(新資料)(下)——「白樺」前史——」(『文学』、一九八二・一〇)は、早くも木下利玄日記の明治四十一年八月二十七日に平民の横尾照子との縁談話が出ているが、足守の旧臣たちが納得していないことが明らかになったとしている。
- (4) 『志賀直哉全集 第十七巻』(岩波書店、二〇〇〇・七)二七頁〜三三頁。